

センバツ 光星3年ぶり10度目

重ねた練習 手応え



3年ぶり10回目のセンバツ出場を決め、喜びを表現する八学光星ナイン。25日午後3時半ごろ、八戸市湊高台の1丁目

「優勝して歴史塗り替える」

昨秋の青森県大会と東北大会を制した八学光星のセンバツ出場が25日、確定した。厳しい冬の練習を乗り越えたナインは今春、全国の頂点を狙う。

「全国制覇を目指す」と仲井宗基監督が太鼓判を押す新チーム。光星の持ち味である強打に加え、どんな試合展開でも下を向かない前向きな姿勢、普段から仲が良いという選手たちのチームワークが強さの秘訣だ。

昨年11月、明治神宮大会に出場し、全国の舞台を経験。1回戦で強打を誇る東邦(愛知)に勝利したが、続く準々決勝はバントや走塁のミスが相次ぎ、高松商(香川)に敗れた。武岡龍世主将は「投手も打者も、レベルが全然違う。細かいミスをしていたのは全国で通用しない」と振り返る。冬期間、チームはフジカルトレーニングや打撃練習に取り組んできた。体重が増え、ストレートの球威が増した。武岡主将も「外で練習できない分、体づくりに集中できる。球場でいこまて打球が伸びるか楽しみ」と自信をみかさせる。

開幕まで残り約2カ月。地道な練習で着実に実力を養う選手たちに、慢心はない。昨秋以降、投手と三塁手の二刀流で活躍する山昂大は、成長はしているが、ここで満足してはいけない。打撃も球速も、もっと伸びるはずと気合を入れ直す。同校は、これまで春夏合わせて計18回の甲子園出場経験がある。2011年夏から12年夏まで3季連続で準優勝を果たしたが、いまが頂点には手が届いていない。後藤は「今年こそ優勝し、光星の歴史を塗り替える」と力強く宣言した。(里村聡)

第91回選抜高校野球大会に八学光星の出場が決まったことについて、青森県の三村知事(25日)は「一気迫あふれるプレーやチームの結束力は県民に勇気と感動を与える」と強調し、「紫紺の優勝旗を持ち帰ってほしいことを県民と共に期待する」と激励のコメントを出した。地元・八戸市の小林真市長は、コメントで「市制施行90周年の節

「投手陣の強化が鍵」と語る仲井宗基監督。25日、八戸市の八学光星高。



「投手陣強化したい」 仲井監督

3年ぶり10度目のセンバツ出場を決めた八学光星。仲井宗基監督に現在の心境やチーム状態、甲子園に向けた意気込みを聞いた。(聞き手・須田山裕太)

「センバツ出場が決まった心境は。出場決定の報告を頂き、気合が入る。100回記念大会となった昨夏にも出場させたももつたし、今回のセンバツ

大会名	回戦	スコア	対戦校
秋季県大会 (2018年9月・弘前市はるか夢球場ほか)	2	9-2	八戸西
	準々決勝	10-0	弘前工
	準決勝	17-1	青森山田
	決勝	5-4	弘前東
3年ぶり16度目の優勝			
秋季東北大会 (18年10月・秋田市こまちスタジアムほか)	2	9-2	専大北上(岩手)
	準々決勝	3-2	羽黒(山形)
	準決勝	7-3	花巻東(岩手)
	決勝	5-3	盛岡大付(岩手)
5年ぶり5度目の優勝			
明治神宮大会 (18年11月・東京都明治神宮球場)	1	7-3	東邦(愛知)
	準々決勝	6-9	高松商(香川)

まずは投手陣の強化だろう。抜きんできた力のある投手はいないが、後藤大海をはじめ、本番までに4人の球速を平均100ポアツさせた。投手のレベルが上がれば捕手の配球も変わり、バッテリーとしての力がレベルアップする。八学学院大の正村弘監督のアドバイスももらっている。打撃面は、どの打順からでも一発長打が出るよう調整したい。レギュラー選手と控え選手の間には力の差があるので、その差を縮めて全体の底上げをしていく。

「優勝旗持ち帰って」 三村知事らエール

目の年にまずは1勝、先輩がなし得なかった全国制覇をしてほしい。夢の舞台で力いっぱいプレーする皆さんの活躍を祈っている」と期待感を示した。和嶋延寿県教育長は「大会を通じて、全国の仲間と交流を深めると共に、選抜の経験を糧に成長することを期待する」と大舞台に立つナインにエールを送った。(上野貴裕)

ツは平成最後の甲子園。いい結果を出せるよう気を引き締めていきたい。

大会での目標は、全国制覇だ。これまで選手たちに「日本一」とか「全国制覇」と簡単に口にするなど言ってきたし、私自身も口にしてこなかった。

経て、3季連続の準優勝を経て、近年の最高成績はベスト8止まり。日本一になる難しさを痛感している。やはり日本一を目標にしなければならぬ。今年チームは全国制覇を目指すチームだ。そのための練習を重ねている。優勝に向けての鍵になるのは。